

松平郷権現祭（春まつり）

松平東照宮の「権現祭」は、1603 年から 1867 年まで日本を統治した徳川幕府の創始者である徳川家康（1543-1616）の生涯を記念して毎年行われている。家康は、現在の松平東照宮のある場所に祖先の館があった松平家の子孫である。松平東照宮は家康を東照大権現という神道の神様として祀っている。権現祭は松平郷で最も古い祭りで、江戸時代（1603-1867）から行われていたことが知られているが、当初どのような形式で行われていたかは不明である。

現在の祭りは、家康の命日である 4 月 17 日を前にした週末に行われる。土曜日の夕方、松平東照宮の神職が、神社の裏にある「産湯の井戸」から御神水を汲み上げ、神々に奉納する。この水は、松平家の赤ちゃんの初風呂に使われていたと言われている。神事後は、太鼓や踊りが披露され、手筒花火が夜を彩る。愛知県のお祭りでおなじみの手筒とは、竹筒に縄を巻き、火薬を詰めたもので、10 メートルもの高さまで火花を飛ばすことができる。徳川家康の時代に戦場の合図として使われていたものから発展したと考えられている。

日曜日には、家康公の霊が宿しているとされる神輿が、松平東照宮から將軍の先祖が眠る松平家の菩提寺である高月院までの坂道を上る。当時の衣装に身を包んだ行列の参加者は寺に入り、松平の墓地に向かって祈りを捧げる。その後、神輿は松平東照宮に戻され、祭りは終了する。